

令和3年度 第64回関東高校サッカー大会 大会総評

報告者：高体連技術委員 庄和高校 野木 悟志

6月5・6・7日の3日間で第64回関東高校サッカー大会が山梨県で開催された。今大会は、1都7県（東京・埼玉・千葉・神奈川・栃木・群馬・茨城・山梨）の各都県1位の8チームをAグループ、各都県2位の8チームをBグループとし、各グループ8チームによるトーナメント方式で行われた。埼玉県からは、Aグループに西武台高校、Bグループに武南高校が出場した。西武台高校は、1回戦山梨学院高校（山梨県1位）に4-2で勝利、準決勝は明秀日立高校（茨城県1位）に1-0で勝利、決勝は日体大柏高校（千葉県1位）に2-1で勝利し、優勝を飾った。武南高校は、1回戦桐光学園高校（神奈川県2位）に0-2で敗れ、初戦敗退となった。

西武台高校は、1回戦山梨学院高校と対戦した。全国王者山梨学院に対して西武台は試合開始からアグレッシブにプレッシャーをかける。すると立ち上がり3分、素早い出足でボールを奪うと、ショートカウンターからFW⑩市川が先制ゴールを挙げる。先取点を奪った西武台はドリブルを織り交ぜながら前線にボールを運び攻撃を仕掛けていくが、山梨学院の素早い切り替えの前に最終ラインを崩すまでには至らない。気温が上がり互いにシンプルな展開を繰り返すなか、徐々に山梨学院がペースを握り始める。飲水直前の21分、山梨学院に左サイドを突破され失点を喫し、同点に追いつかれる。その後は膠着状態が続き、1-1のまま前半終了。後半序盤、互いに激しい球際の攻防と素早い攻守の切り替えを見せる。徐々に西武台がボールを保持していく時間が増えるなか、52分にFKのこぼれ球に反応したMF⑨丸山がミドルシュートを決め、西武台が勝ち越す。さらに68分、西武台はPKを左SB③安木が落ち着いて決め、3-1とリードを広げる。その直後の70分、中央付近でボールホルダーへの寄せが遅れたところを見逃さなかった山梨学院に豪快なミドルシュートを決められ、3-2とされる。1点差に詰め寄られた西武台であったが、慌てることなく冷静にゲームをコントロールし、後半アディショナルタイムにはMF⑨丸山が追加点を挙げ、4-2で勝利を収め準決勝進出を決めた。

準決勝は、明秀日立高校と対戦した。試合序盤から互いにシンプルに前線の選手にロングボールを配給し攻撃の起点を作ろうとするも、両チームのDFラインのポジショニングやヘディングでの対応が良く拮抗した展開となる。前半はスコアレスのまま終了。後半開始から西武台は1-4-4-2のシステムに変更する（前半は1-4-2-3-1）。前線のターゲットを増やしたことでロングボールからの攻撃の圧力が強まり、相手コートの深い位置に進入する回数が増えていく。西武台ペースで試合が進むなか、58分に右サイドを起点とした攻撃から途中出場のMF⑭松原が得点を挙げ、均衡を破る。失点後、前線の選手を入れ替えて攻撃の活性化を図る明秀日立に対し、西武台は強固な守備ブロックを形成し、相手に有効なスペースを与えない。終盤、明秀日立のパワープレーに対して最後まで集中を切ら

さずに戦い続けた西武台が1-0で勝利し、決勝戦に駒を進めた。

決勝戦は、日体大柏高校と対戦した。立ち上がり、西武台はDFラインから丁寧にビルドアップし、両SBが高い位置を取ることで日体大柏SHをサイドに張り付け、中央に効果的なくさびのパスを入れ攻撃を仕掛ける。日体大柏は連動したプレスからボールを奪うと、FWをターゲットにパスを送りショートカウンターを仕掛けるが、西武台CB⑤原田を中心とする統率の取れた守備網の前に攻撃の形を作ることができない。西武台が試合の主導権を握るなか、長短のパスに加えドリブルを織り交ぜて人とボールを良く動かし日体大柏の守備ブロックを崩しにかかる。すると29分、左SB③安木のクロスにFW⑩市川がヘディングシュートを放ち、ゴールネットを揺らす。その後も西武台が試合を優位に進め、1点をリードして前半を折り返す。後半、西武台は流れの中やセットプレーからチャンスを作るが、決め切ることができないでいると、60分に一瞬の隙を突かれ失点を喫する。同点に追いつき勢いづく日体大柏に対し、守備の時間が続く西武台であったが、献身的なプレーで追加点を許さない。そして69分、相手DFの裏へ抜け出したFW⑩市川がGKとの1対1を冷静に決め、勝ち越しに成功する。終盤、リードを奪った西武台はボランチを3枚にし、中央の守備を厚くして日体大柏の攻撃を封じ、勝利を手にした。

西武台は怪我人が複数いるなかで、今大会の3試合をタフに勝負強く戦い抜き、見事に11年ぶり3度目の栄冠に輝いた。優秀選手には、安定感のあるセービングと正確なロングフットを武器とするGK①浅沼、左足の精度の高いクロスで多くの決定機を演出するDF③安木、キャプテンとしてチームを牽引し攻守にハードワークできるDF⑤原田、巧みなドリブルと得点感覚に優れたMF⑨丸山、今大会3ゴールを決め得点王に輝いたFW⑩市川の5名が選出された。

武南高校は、1回戦桐光学園高校と対戦した。試合序盤、桐光学園がFWをターゲットにロングボールを多用しながらスピーディーな攻撃を仕掛け、武南ゴールを脅かす。武南は身体を張った守備でゴールを死守し、得点を許さない。桐光学園のペースで試合が進むなか、武南はドリブルとショートパスを織り交ぜながらサイドを攻略して決定機を演出するが決め切ることができず、スコアレスのまま前半終了。後半立ち上がりから攻守においてアグレッシブな動きを見せる桐光学園がペースを握る。SHとSBで数的優位な状況を作り出し、サイドを攻略しクロスから武南ゴールに迫る場面を増やしていく。53分、サイド攻撃を中心に攻勢に出続ける桐光学園がCKから先取点を奪う。リードを奪われた武南は交代カードをきりながら試合の流れを変えようと試みるが、桐光学園のフィジカルの強さと寄せの速さの前に攻撃の起点を作ることができない。試合終盤でも互いに運動量が落ちることなく、球際の激しい攻防が続く。同点に追いつきたい武南はMF⑭水野にボールを集めながら果敢にゴールを目指していくが、桐光学園の堅い守備を崩せない。後半アディショナルタイムには前がかりになった隙を突かれ追加点を許し、0-2で敗れた。

残念ながら初戦敗退という結果になったが、最後まで自チームのスタイルであるパスサッカーを貫き、諦めないプレーを見せ続けた武南の健闘を称えたい。

今大会を振り返ると、A・Bグループ全14試合すべての試合で先取点を奪ったチームが勝利を収めたという結果であった。選手個々の戦術理解度と適応力が高く、試合の流れや戦況、スコア等に応じて柔軟にシステムや戦い方を変えることができ、試合巧者ぶりを発揮したチームが多かったことがうかがえる。また、西武台のSB③安木、⑤原田を筆頭に上位に進出したチームには攻守において躍動するSBの存在が見られた。対人能力に強いなど守備の安定感があることに加え、攻撃のスイッチとなる縦パスを入れたり、高い位置まで駆け上がって質の高いクロスでゴールを演出したり、中にカットインしてシュートを放ったりするなど、攻撃面でも高い存在感を示し、勝利に貢献する活躍を見せていた。チームによってSBの果たす役割に違いはあるが、高校サッカーを含めた現代サッカーにおいて、SBというポジションの重要性は間違いなく高まってきていると言える。

関東大会に出場した2チームには、今大会の経験を糧にさらなる飛躍を期待して総評とする。